多様化するヘッジ手法

編集部

「ベニスの商人」について知らない人はいないでしょう。借金をして東洋貿易をしていたところ、船が沈没、その借金の担保にしていた肉1ポンドを切り取られそうになった話です。だが、実際にはこのようなことは、まず起こりません。というのも、貿易商人は必ず財産を分散、1つの船が沈んでも、破産しないようにしていたからです。これがヘッジ(保険つなぎ)です。

さらに、遠くから商品を仕入れ、その到着前に価格が下がったときに先物取引で売るという手法も開発されました。もし、航海中に商品の価格が下がっても、先物価格も同様に下がり、そちらで利益が出て、現物の損を相殺できるからです。

予期しないリスクから経営守る

この結果、先物取引は予期しないリスクから経営を守る手段として、欠かせない手法として、広く世界で行われるようになりました。1531年にベルギーで始まり、日本でも1700年代に八代将軍吉宗の命でコメの先物取引が開始されました。アメリカでは1800年代にシカゴに取引所が設立され、価格の変動から農産物などの生産者、取引業者を守っています。

その先物取引が急展開したのが、1970年代です。商品価格のヘッジに使われていたのが、Tボンド、ユーロダラーなど金融商品にも使われるようになり、一気にその範囲を拡大しました。いまでは「株式先物」「債券先物」なども開発され、資産のヘッジにも多用されています。

先物取引の種類

- 先物取引
  - 商品先物取引―貴金属，穀物，ゴムなど
  - 株式先物取引―日経平均先物，TOPIX先物など
  - 債券先物取引―国債，財務省証券など
  - 通貨先物取引―ドル，円など
  - 金利先物取引―ユーロ，円など

多様化するその手段

そして、21世紀。リスクヘッジはさらに多様な展開が予想されます。気温の変化から経営を守る天候デリバティブ、温暖化から地球を守る排出権取引などさまざまな分野に使われるようになるでしょう。

21世紀はコンピューターの時代といっても過言ではありません。しかし、いくら人智が進んでも、予期しない出来事、不測の事態は数多く存在します。しかも、その範囲はますます拡大することが予想されます。経営判断がスピード化されれば、その分、リスクが増大するからです。そのリスクを商品化すれば利益も出ます。いまそのようなリスクヘッジ商品の開発の動きも広がっています。今後、リスクヘッジ商品はますます範囲を広げ、種類も多様になるでしょう。